ホームヘルパー養成講習者のレクリエーション・余暇

山本　存

The Recreation and Leisure Activity in Home–helper Training Seminars

YAMAMOTO Yasushi

Abstract : The objective of this research was to compare the leisure and recreation situation for elderly people being cared for by persons who have received home-helper training seminars to that in persons who are carrying out volunteer elder- care activities and to discover whether there were differences, and if so, to clarify what the differences were and to use these basic findings when reviewing the content of the training seminars for persons studying to become home-helpers.

The comparison of the home-helpers that received training seminars and the experienced volunteers showed that, compared with the home-helpers, the volunteers tended to be more supportive in their actions and attitudes toward leisure activities.

With regard to training seminars for home-helpers, the importance of enjoying and supporting leisure time activities will be stressed and the home-helpers will be instructed to spend more effort in becoming involved in leisure activities themselves. In other words, the implications were that there is a need to explore the area of recreation activities.

1. はじめに

2000年4月に施行された介護保険制度も3年が経過した。これまでのサービス利用者の増加からみると，在宅志向が進まなかったことや施設志向が増加したという課題を抱えつつも概ね順調に推移してきており，介護の社会化を掲げた当初の目的は，潜在化していた人たちのサービス利用が生まれてきたことからも一応の成果をあげたといえる。しかし，介護給付費が2025年度までに現在の約4倍の20兆円に達するという見通しがなされ，厚生労働省は2005年度に予定されている介護保険制度の見直しに向けて具体的な検討を始めた。急激な負担増と給付削減を避けるための抜本的な制度再設計が予想される。

2002年11月末の65歳以上の被保険者は2,364万人で，介護認定を受けた者は333万人と高齢者全体の14%を占めている。そのうち，要支援47万人，要介護1101万人と認定を受けた者が急増してきている（全国高齢者保健福祉・介護保険関係主管課長会議資料2003. 2. 25.）。介護施設は急速に整備され，介護保険発足当時（2000. 4）には52万人分に達し，さらに整備されて2003年6月末には72万人分に，居宅サービスも2000年の97万人分から201万人にまで増加している（厚生労働省　介護事業報告　2003.）。介護保険事業状況報告（暫定）月報の15年6月分を前年同月の14年6月分と比較してみると次のようになる。1号被保険者数は23,314,000人から24,041,000人と約3.1%しか増加していないが，要介護認定者は，3,125,000人から3,570,000と約14.2%（445,000人）の増加となっている。また，2号被保険者を含む居宅介護サービス受給者の介護度別増加をみると，要支援が21.5%，要介護1が21.7%，要介護2が15.0%，要介護3が12.9%，要介護4が9.6%，要介護5が5.9%

となり，要介護度が低いほどサービス利用者は増加している傾向にある。居宅サービス受給者約201万人の半数以上を要支援（約31.7万人）と要介護1（約74.0万人）で占めることになる。

居宅サービスについて，1989年のゴールドプランでは，10年間にホームヘルパーを約3万人から10万人確保へ，1994年の新ゴールドプランでは17万人へと引き上げられ，1999年のゴールドプラン21では，平成16年度に（一定の前提条件の試算ながら）さらに35万人確保という目標が示された。

ホームヘルパーの増員は社会的な要請に合致するものではあるが，大量の養成には知識や技術の専門性をいかに確保していくかという課題にぶつかる[1]。他の社会福祉の専門職資格に比べてもその養成期間はきわめて短い。

一方，福祉サービス利用者についていえば，ADL（日常生活動作）の向上のみに目を向けるのではなく，生活に占める膨大な余暇（自由時間）をいかに有用に過ごすことができるかにも留意する必要がある。それによって利用者のQOL（生活の質）は大きく変化すると思われるからである。レクリエーションの援助は，その意味で重要な役割を担っているといえる。すなわち，レクリエーションはおもに余暇において経験され，自発的で遊びを基盤として楽しみをともない，心身の健康や生活の質的維持・向上に貢献するものであるからであり[2]，福祉分野でのレクリエーションの援助は言い換えれば，「生きがい」を生み出し維持する援助ということになるからである[3]。レクリエーション活動でもあるスポーツ活動について，杉山らは，「スポーツ活動をめぐる諸条件のうち，高齢者の積極的，能動的，肯定的態度を反映するいくつかの条件が生きがい意識を増強する[4]」と報告している。また，横山によれば，「活動量の少ない非活発性志向の高齢者は，活動に関する自らの達成度を決定するための外的基準が低くなり，少しの活動でも意義あるものと評価して容易に達成感や主観的幸福感が得られる[5]」と述べている。非活発性志向の典型ともいえる福祉利用者の生活のなかにレクリエーション活動を促す援助が有効に働けば，福祉利用者のQOLの向上が期待できるのではないだろうか。

個別に利用者とかかわるホームヘルパーへの期待はそれゆえ大きなものがあるといえる。ホームヘルパーは居宅サービス利用者にとって，レクリエーションの援助を含む基本的生活援助の重要な役割を担い，心のよりどころとなるはずである。ホームヘルパーの資質を考えるうえで，レクリエーション活動を豊富に体験し，その役割・意義を強く認識しているほど，豊かな人間性と共感的理解を伴った援助技術以上の効果をもたらしてくれるものと考える。

ホームヘルパーの現況については，日本労働機構などによる就業実態の調査は見られるものの[6]，実証的な調査は数少ない。

そこで，本研究ではホームヘルパー養成講習受講者の余暇・レクリエーションの現状を，高齢者に対するボランティア実践者と比較をすることで明らかにしていきたい。そして，ホームヘルパー養成講習科目であるレクリエーション体験学習の内容を吟味する際の基礎的資料を得ることを目的とする。

2. 方　　法

分析するデータの収集を目的として，質問紙調査を実施した。調査は，ホームヘルパー養成講習を受講している者と高齢者に対してボランティア活動を実践している者とを対象にして2000年2月～2003年7月に行った。調査対象は，阪神間で実施されたホームヘルパー養成2級研修受講者（15会場）と兵庫県M町ボランティアの集いで実施されたボランティア研修会受講者とした。ここでいうボランティア活動とは，劇，民謡，カラオケ，朗読，紙芝居，ガイドヘルパー，配食サービス，手芸・クラフト，踊りを通じて定期的に介護老人保健福祉施設の利用者とかかわりをもち続けているものをいう。なお，ホームヘルパー養成講習受講者に対してはレクリエーション体験学習（科目）で，ボランティア実践者に対しては福祉レクリエーションというテーマで，それぞれ調査前に90分程度の社会福祉分野におけるレクリエーションの考え方や実践の現状を概説した。調査方法は，質問紙法・自記式による集合配布・留置・集合回収で実施した。

調査項目は，研修会参加の目的，余暇の考え方や実施状況（5件法），余暇生活診断に使用される余暇生活実態の調査項目*1を活用した。

有効回答率は，95.6%（571/598）であった。集計および分析には，パソコン汎用統計ソフトを使用し，クロス集計および平均値の差の検定，カイ二乗検定およびfisherの直接確立検定を行った。

3. 結果と考察

(1) 基本的属性

ホームヘルパー養成講習受講者（以下ヘルパー群という）とボランティア研修参加者（以下ボランティア群という）の男女別・年齢別の人数は，表1，表2のとおりである。

ヘルパー群は男性は50歳代（49.5%）が多く，女性は50歳代（33.0%），40歳代（32.2%）と続く。ボランティア群では男性が60歳代（68.1%）が最も多く，女性は60歳代（45.5%），50歳代（34.1%）となり男女ともヘルパー群に比べやや年齢が上がる。また，仕事をしていない人はヘルパー群男性71.1%，ボランティア群男性51.1%，ヘルパー群女性61.1%，ボランティア群女性75.0%であり，逆に仕事をもっている人は，それぞれ20.6%，44.7%，29.8%，23.9%であった。（表3，表4）

また，積極的なレクリエーション活動・余暇活動としての趣味（趣味活動）についてみると，ボランティア群の男性全てが趣味を持つとこたえた（表5，表6）。趣味活動の頻度についてはボランティア群はヘルパー群よりも多い傾向にあった（表7，表8）。また，活動時間には両群の差異はみられず，2～3時間の活

表1　ヘルパー群　性別・年齢別

	10歳代	20歳代	30歳代	40歳代	50歳代	60歳代	計
男　性	2	18	13	10	48	6	97
女　性	1	53	57	109	112	7	339
計	3	71	70	119	160	13	436

表2　ボランティア群　性別・年齢別

	10代	20代	30代	40代	50代	60代	70代	計
男　性	0	0	0	4	7	32	4	47
女　性	0	3	1	5	30	40	12	91
計	0	3	1	9	37	72	16	138

表3　職業（男性）

	学生	有職	無職	その他	計
ヘルパー群	5	20	69	3	97
ボランティア群	0	21	24	2	47
計	5	41	93	5	144

表4　職業（女性）

	学生	有職	無職(専業主婦)	その他	計
ヘルパー群	9	101	207（121）	22	339
ボランティア群	0	21	66（ 53）	1	88
計	9	122	273（174）	23	427

表5　趣味の有無（男性）

	趣味あり	趣味なし	計	χ二乗値	自由度	p値	
ヘルパー群	85	12	97	4.827	1	0.028	*
ボランティア群	47	0	47				
計	132	12	144	9	37	72	16

*p＝.05

表6　趣味の有無（女性）

	趣味あり	趣味なし	計
ヘルパー群	228	84	312
ボランティア群	38	7	45
計	266	91	357

p＝0.1463

表7　活動頻度（男性）

	毎日	3–4回/週	2–3回/週	1回/週	1–2回/月	その他	計	χ二乗値	自由度	p値	検定
ヘルパー群	10	8	21	21	17	7	84	28.875	5	0.000	***
ボランティア群	12	17	9	9	0	0	47				
計	22	25	30	30	17	7	131				

***p<.001

表8　活動頻度（女性）

	毎日	3–4回/週	2–3回/週	1回/週	1–2回/月	その他	計	χ二乗値	自由度	p値	検定
ヘルパー群	39	36	48	89	49	27	288	22.630	5	0.0004	***
ボランティア群	11	16	20	34	0	3	84				
計	50	52	68	123	49	30	372				

***p<.001

表9　活動時間（男性）

	1時間以下	2–3時間	3–4時間	5–6時間	その他	計
ヘルパー群	13	33	12	18	8	84
ボランティア群	6	29	6	6	0	47
計	19	62	18	24	8	131

表10　活動時間（女性）

	1時間以下	2–3時間	3–4時間	5–6時間	その他	計
ヘルパー群	15	27	164	42	24	301
ボランティア群	6	7	52	18	2	90
計	21	34	216	60	26	391

動が最も多かった。男性においては活動時間にばらつきがみられ，5～6時間とこたえた内訳が釣りやゴルフといった野外での活動であることに特徴がうかがえる（表9，表10）。

(2) ヘルパー群とボランティア群

i）受講の理由・目的

受講の理由・目的についてみると，男性については両群に差は認められなかった（5件法を用いたもので数字が低いほど肯定的な回答を示す）。女性においては，「ボランティアをしたい・理解したい（p<0.001）」，「仲間をつくりたい（p<0.001）」，「余暇を充実させたい（p<0.001）」，「自分を試したい（p<0.05）」，「やりがいのため（p<0.001）」の項目でボランティア群の関心が高い。一方，「家族のために役立てたい（p<0.01）」の項目だけはヘルパー群の関心が高い（表11，表12）。

また，性差をみると，ボランティア群においては，「ボランティアをしたい（p<0.05）」，「仲間をつくりたい（p<0.001）」，「余暇を充実させたい（p<0.05）」，「生涯学習をしたい（p<0.01）」，「自分を試したい（p<0.05）」において女性のほうが積極的な傾向にあり，ヘルパー群においては，「家族のために役立てたい（p<0.01）」について女性の意識が高い（表13，表14）。ヘルパー群では受講後のホームヘルパーへの就業に対する意識で，男性は女性よりも常勤への希望が強く（p<0.01），パートタイムでの就業にはやや否定的であるのに対し，女性は男性よりもパートタイムでの就業希望が強く（p<0.001）フルタイムでの就業も肯定的であった。女性においては，家庭での役割との関連が強いことが示唆される。

ii）余暇の状況

次に，余暇における活動の状況をみてみると，男性で差が認められたものは，「平日の余暇も積極的に活動する（p<0.01）」であり，余暇生活の実態（得点が高いほど余暇を充実して過ごしている傾向が強い・20点満点）においてもボランティア群の方が積極的な傾向にあった（表15）。女性についてみると，否定的回答ながらも，「暇なときに何をしていいかわからない（p<0.001）」，「平日の余暇はテレビで過ごす（p<0.001）」という傾向がボランティア群に高い。しかしながら，「休日の余暇はなるべく身体を動かす（p<0.001）」，「休日の余暇はゆっくり身体を休ませる（p<0.05）」という項目もボランティア群に高い傾向

表 11　受講の理由・目的（男性）

項　目	ヘルパー群	ボランティア群	t 値	p 値	検定
ボランティアをしたい	2.742	2.457	1.354	0.089	
家族のため	2.113	2.130	0.081	0.468	
仲間をつくりたい	2.443	2.457	0.063	0.475	
余暇を充実させたい	2.454	2.261	0.885	0.189	
社会貢献したい	1.990	2.196	1.047	0.148	
生涯学習をしたい	2.093	2.348	1.280	0.101	
自分を試したい	2.206	2.261	0.274	0.392	
やりがいのため	2.474	2.383	0.399	0.345	

表 12　受講の理由・目的（女性）

項　目	ヘルパー群	ボランティア群	t 値	p 値	検定
ボランティアをしたい	2.719	2.078	5.255	0.000	***
家族のため	1.791	2.100	2.564	0.005	**
仲間をつくりたい	2.381	1.764	5.105	0.000	***
余暇を充実させたい	2.284	1.899	3.052	0.001	***
社会貢献したい	1.953	1.888	0.643	0.260	
生涯学習をしたい	1.976	1.910	0.600	0.275	
自分を試したい	2.130	1.921	1.814	0.035	*
やりがいのため	2.499	2.111	3.069	0.001	***

*p<.05　**p<.01　***p<.001

表 13　受講の理由・目的（ヘルパー群）

項　目	男性	女性	t 値	p 値	検定
フルタイム希望	2.558	2.780	2.651	0.004	**
パートタイム希望	3.392	2.448	6.849	0.000	***
ボランティアをしたい	2.742	2.719	0.184	0.427	
家族のため	2.113	1.791	2.718	0.003	**
仲間をつくりたい	2.443	2.381	0.506	0.307	
余暇を充実させたい	2.454	2.284	1.325	0.093	
社会貢献したい	1.990	1.953	0.371	0.356	
生涯学習をしたい	2.093	1.976	1.069	0.143	
自分を試したい	2.206	2.130	0.671	0.251	
自分を高めたい	1.831	1.758	0.624	0.267	
やりがいのため	2.434	2.499	0.190	0.425	

**p<.01　***p<.001

表 14　受講の理由・目的（ボランティア群）

項　目	男性	女性	t 値	p 値	検定
ボランティアをしたい	2.457	2.078	2.192	0.015	*
家族のため	2.130	2.100	0.147	0.442	
仲間をつくりたい	2.457	1.764	3.865	0.0001	***
余暇を充実させたい	2.261	1.899	1.871	0.032	*
社会貢献したい	2.196	1.888	1.576	0.059	
生涯学習をしたい	2.348	1.710	2.242	0.013	**
自分を試したい	2.261	1.921	1.777	0.039	*
やりがいのため	2.383	2.111	1.294	0.099	

*p<.05　**p<.01　***p<.001

表 15　余暇の状況（男性）

項　目	ヘルパー群	ボランティア群	t 値	p 値	検定
余暇を楽しんでいる	2.454	2.362	0.441	0.330	
仲間がいる	2.495	2.319	0.820	0.206	
余暇の過ごし方がわからない	3.814	3.787	0.120	0.452	
テレビで過ごす	3.619	3.553	0.286	0.388	
積極的に活動する	2.588	2.106	2.366	0.009	**
身体を動かす	2.660	2.447	1.104	0.136	
休養する	2.918	2.830	0.425	0.336	
余暇生活実態	11.052	14.702	5.374	0.000	***

**p<.01　***p<.001

表16　余暇の状況（女性）

項　　目	ヘルパー群	ボランティア群	t 値	p 値	検定
余暇を楽しんでいる	2.401	1.789	5.414	0.000	***
仲間がいる	2.142	1.878	2.114	0.018	*
余暇の過ごし方がわからない	3.964	3.544	3.111	0.001	***
テレビで過ごす	3.782	3.256	3.957	0.000	***
積極的に活動する	2.559	2.367	1.538	0.062	
身体を動かす	2.770	2.244	4.257	0.000	***
休養する	2.826	2.578	2.033	0.021	*
余暇生活実態	11.416	13.739	5.037	0.000	***

*p<.05　**p<.01　***p<.001

表17　余暇の状況（ヘルパー群）表

項　　目	男性	女性	t 値	p 値	検定
余暇を楽しんでいる	2.454	2.401	0.442	0.330	
仲間がいる	2.495	2.142	2.783	0.003	**
余暇の過ごし方がわからない	3.814	3.964	1.147	0.126	
テレビで過ごす	3.619	3.782	1.256	0.105	
積極的に活動する	2.588	2.559	0.231	0.409	
身体を動かす	2.660	2.770	0.929	0.177	
休養する	2.918	2.826	0.763	0.223	
余暇生活実態	11.052	11.416	0.822	0.206	

**p<.01

表18　余暇の状況（ボランティア群）

項　　目	男性	女性	t 値	p 値	検定
余暇を楽しんでいる	2.362	1.789	3.35	0.001	***
仲間がいる	2.319	1.878	2.312	0.011	**
余暇の過ごし方がわからない	3.787	3.544	1.047	0.149	
テレビで過ごす	3.553	3.256	1.299	0.098	
積極的に活動する	2.106	2.367	1.315	0.096	
身体を動かす	2.447	2.244	1.001	0.159	
休養する	2.830	2.578	1.239	0.109	
余暇生活実態	14.702	13.739	1.393	0.083	

**p<.01　***p<.001

にあった（表16）。それ以外の項目や余暇生活実態においてもボランティア群の方が高いことから，休日の余暇への活動意欲や活動実態に積極的な姿勢があることが考えられる。

余暇生活実態の項目ごとにFisherの直接確立検定を行ってみると，男女ともに有意な差が認められたものは，「意識して自分の時間をつくるようにしている（p<0.05）」，「教養を高めたり，社交のために会合に出るようにしている（p<0.001）」，「年に一度は旅行をしている（仕事での出張は含まない）（p<0.001）」，「地域社会活動に参加している（p<0.001）」，「職場や地域のレクリエーション活動によく参加している（p<0.001）」，「ボランティア活動や社会奉仕活動をしている（p<0.01）」であり，ボランティア群において肯定的な状況となった。また，男性のみ有意差があらわれたものは，「仕事以外に熱中している遊びや活動をもっている（p<0.001）」，「月に1度は郊外や野外で楽しんでいる（p<0.05）」，「スポーツクラブやチームのメンバーとして積極的に活動している（p<0.001）」，「人からスポーツやゲームに誘われると喜んですぐに応じる（p<0.05）」，「余暇活動は，暇つぶし以上の何かをもたらしてくれる（p<0.001）」，「余暇活動は，精神的な充実を与えてくれる（p<0.05）」であり，女性のみに有意差が認められたものは，「仕事とは直接結びつかない習い事をしている（p<0.001）」，「休みには外食やショッピングをして楽しんでいる（p<0.001）」となり，いずれもボランティア群に肯定的な状況が示された（表19～表38）。

つまり，ボランティア群のほうが余暇において実質的な活動も活発であり，それに対する意識も高い。また，自らを磨いたり，人間関係を構築したり，いわゆる社会性余暇活動に参加したりと余暇を有効に活用している傾向が強いといえる。余暇におけるレクリエーション活動の占める時間の割合が大きいことがうかがえる。

(3) 男性と女性

次に，各群の性差について検討を加える。

表 19　熱中している遊びや活動をもっている（男性）

	はい	いいえ	計	p 値	
ヘルパー群	71	26	97	0.001	***
ボランティア	45	2	47		
計	116	28	144		

***p<.001

表 20　意識して自分の時間をつくるようにしている（男性）

	はい	いいえ	計	p 値	
ヘルパー群	55	42	97	0.045	*
ボランティア群	35	12	47		
計	90	54	144		

*p<.05

表 21　月に 1 度は郊外や野外で楽しんでいる（男性）

	はい	いいえ	計	p 値	
ヘルパー群	69	28	97	0.037	*
ボランティア群	41	6	47		
計	110	34	144		

***p<.001

表 22　教養を高めたり社交のための会合に出るようにしている（男性）

	はい	いいえ	計	p 値	
ヘルパー群	38	59	97	0.000	***
ボランティア群	36	11	47		
計	74	70	144		

***p<.001

表 23　年に 1 度は旅行をしている（男性）

	はい	いいえ	計	p 値	
ヘルパー群	62	35	97	0.000	***
ボランティア群	44	3	47		
計	106	38	144		

***p<.001

表 24　地域社会活動に参加している（男性）

	はい	いいえ	計	p 値	
ヘルパー群	25	72	97	0.000	***
ボランティア群	32	15	47		
計	57	87	144		

***p<.001

表 25　スポーツクラブやチームのメンバーとして活動している（男性）

	はい	いいえ	計	p 値	
ヘルパー群	25	72	97	0.000	***
ボランティア群	34	13	47		
計	59	85	144		

***p<.001

表 26　職場や地域のレクリエーション活動によく参加する（男性）

	はい	いいえ	計	p 値	
ヘルパー群	25	72	97	0.000	***
ボランティア群	38	9	47		
計	63	81	144		

***p<.001

ヘルパー群における男女の比較では，受講の理由・目的において「家族の役に立つため（p<0.01）」が女性に多い（表 13）。これは現在一般的な家族介護が女性で成り立っていることを反映している。本来ホームヘルパー養成講習はホームヘルプサービスの専門職を目指すという意味でも市民対象の社会教育としての社会福祉教育ではなく，就労を目的とした研修であるべきだ[7]という課題にもぶつかる。また，余暇の状況においては，「余暇を楽しむ仲間がいる」において女性の方が社交的である傾向が示された（表 17）。

ボランティア群においては，多くの項目について女性の前向きな姿勢を示すものが多く，受講の理由・目的では，「ボランティアをしたい・理解したい（p<0.05）」，「仲間をつくりたい（p<0.001）」，「余暇を充実させたい（p<0.05）」，「生涯学習をしたい（p<0.01）」，「自分を試したい（p<0.05）」に差がみられた（表 14）。また，「余暇を楽しんでいる（p<0.001）」，「余暇をともに過ごす仲間がいる（p<0.01）」においても差が認められた。男性に比べ女性の貪欲な自己開発に取りくんでいこうとする姿勢がここでもみうけられる（表 18）。

また，余暇生活実態を項目別にみると，ヘルパー群では男性に多いものが，「自分の趣味は専門家なみに自信をもって説明できる（p<0.001）」，「職場以外で心を許しあえる友人が 5 人以上いる（p<0.05）」であり，女性に回答が多いものは，「地域社会活動に参加している（p<0.001）」，「家族とのだんらんを楽しんでいる（p<0.05）」，「休みに外食やショッピングを楽しんでいる（p<0.01）」であった。

ボランティア群については，男性に多いものは，「熱中している遊びや活動をもっている（p<0.01）」，「月に一度は郊外や野外で楽しんでいる（p<0.05）」，「スポーツクラブやチームのメンバーとして積極的に活動している（p<0.001）」，「職場や地域のレクリエーション活動によく参加している（p<0.05）」，「人からスポーツやゲームに誘われると喜んですぐに応じる（p<0.05）」であり，女性に多いものが，「仕事とは直接結びつかない習い事をしている（p<0.05）」，「余暇

表27　誘われるとスポーツやゲームに喜んで応じる（男性）

	はい	いいえ	計	p 値	
ヘルパー群	62	35	97	0.021	*
ボランティア群	39	8	47		
計	101	43	144		

*p<.05

表28　余暇活動は何かをもたらしてくれる（男性）

	はい	いいえ	計	p 値	
ヘルパー群	82	15	97	0.001	***
ボランティア群	27	20	47		
計	109	35	144		

***p<.001

表29　余暇活動は精神的な充実を与えてくれる（男性）

	はい	いいえ	計	p 値	
ヘルパー群	84	13	97	0.023	*
ボランティア群	33	14	47		
計	117	27	144		

*p<.05

表30　ボランティア活動や社会奉仕活動をしている（男性）

	はい	いいえ	計	p 値	
ヘルパー群	29	68	97	0.000	***
ボランティア群	44	3	47		
計	73	71	144		

***p<.001

表31　仕事に関係ない習いごとしている（女性）

	はい	いいえ	計	p 値	
ヘルパー群	137	202	339	0.000	***
ボランティア群	63	25	88		
計	200	227	427		

***p<.001

表32　意識して自分の時間をつくるようにしている（女性）

	はい	いいえ	計	p 値	
ヘルパー群	210	129	339	0.024	*
ボランティア群	66	22	88		
計	276	151	427		

*p<.05

表33　教養を高めたり社交のための会合に出るようにしている（女性）

	はい	いいえ	計	p 値	
ヘルパー群	135	204	339	0.000	***
ボランティア群	64	24	88		
計	199	228	427		

***p<.001

表34　年に1度は旅行をしている（女性）

	はい	いいえ	計	p 値	
ヘルパー群	219	120	339	0.000	***
ボランティア群	79	9	88		
計	298	129	427		

***p<.001

表35　地域社会活動に参加している（女性）

	はい	いいえ	計	p 値	
ヘルパー群	154	185	339	0.000	***
ボランティア群	73	15	88		
	227	200	427		

***p<.001

表36　休みに外食やショッピングを楽しんでいる（女性）

	はい	いいえ	計	p 値	
ヘルパー群	290	49	339	0.002	**
ボランティア群	62	26	88		
計	352	75	427		

***p<.001

表37　職場や地域のレクリエーション活動によく参加する（女性）

	はい	いいえ	計	p 値	
ヘルパー群	98	241	339	0.000	***
ボランティア群	55	33	88		
計	153	274	427		

***p<.001

表38　ボランティア活動や社会奉仕活動をしている（女性）

	はい	いいえ	計	p 値	
ヘルパー群	92	247	339	0.000	***
ボランティア群	86	2	88		
計	178	249	427		

***p<.001

での活動や行動は暇つぶし以上の何かをもたらしてくれる（$p<0.01$）」，「余暇に行う活動や行動は生きているという実感を感じさせたり，精神的な充実感を与えてくれる（$p<0.01$）」であった。

余暇の活用状況を考えれば，概ね女性のほうが積極的な傾向にあるが，ボランティア群に限ってみれば男性においても積極的な姿がいくつかあるところに特徴がある。現在の社会福祉のボランティアを支える多数が女性であるところから考えると，ボランティアを行う少数の男性は一部の活動的な者に限られていることがわかる。

また，ヘルパー群についていえば，就業希望は，男

性ではフルタイム志向が強く，女性はパートタイム志向が強い傾向にある。将来の居宅サービスをはじめとする社会福祉従事への期待が大きいわけであるが，昨今の景気低迷による雇用の不安やホームヘルパーの給与体系の低さからなかなか思うようには雇用が進まず，ホームヘルパーの大部分が女性であり，不安定な登録型・非正規雇用が現状である[8]。それだけに，ホームヘルパー養成講習受講者の男性にとって就業は現実的には厳しいものがある。しかしながら，ホームヘルパー養成講習を終了することによる広い意味での社会福祉現場への就業を可能にしたという事実は，職業選択において選択肢がいくつか増えることとなり意味は大きいのかもしれない。また，職業としてではなく，将来の家族介護に備えるためや教養のために受講する傾向も認められる。これは施設福祉の待機者が多いという状況が影響しているともいえる。

4. ま と め

本研究において，将来的に社会福祉従事者になり得るホームヘルパー養成講習受講者は，日常的な余暇活動の現況やその意識について，福祉現場でのボランティア活動実践者と比較すると総じて低調である傾向がみられた。

ボランティア活動を継続している方々は，男女とも余暇における積極的な活動実態があり，意識も高い。つまり自己のレクリエーション活動が活発になされ（レクリエーションを多く体験し），その価値を肯定的にとらえている傾向がある。利用者に対するレクリエーション援助からみると望ましい方向であるといえよう。一方，ホームヘルパー養成講習に集う方々は将来専門職として位置づけられるだけに，利用者のレクリエーション援助という視点から考えると厳しい状況にあるといえる。ホームヘルパー2級は，社会福祉士，介護福祉士，保育士のような長期養成（2年以上）ではなく修了検定も存在しない。就業するとすぐに利用者と接することになり，現任研修の場やスーパーバイズを受ける機会も少なく，適性が判断されにくい。また，ここまででみた結果のように，福祉利用者のQOLの向上に寄与できるレクリエーション活動援助，余暇活動援助の必要性から考えると，ホームヘルパー養成講習の場と現任研修の場という段階を踏んだ研修システムの構築が急務であるといえる。現場での課題と照らし合わせて，レクリエーションの有効性，レクリエーション活動の生活化の促進などを含めたレクリエーション教育の充実が一層望まれる。レクリエーション活動の実践あるいは模索が結果的には利用者に還元されるということを強く唱えていくべきであろう。

また，さまざまな出来事に忙殺されて満足に余暇をもつこともできずに過ごしている現代社会に生きる私たちにとっても，自らの生活を見直し，レクリエーションの生活化や生活のレクリエーション化の実現に向けてさまざまな検討を重ねていかなければならないことを示唆している。

参 考 文 献

1）杉山博昭，「ホームヘルパー養成研修事業の問題点と課題」，総合社会福祉研究，19：87–95, 2001.

2）日本レクリエーション協会編，福祉レクリエーションの援助，中央法規，Pp 77, 1995.

3）日本レクリエーション協会編，前掲書，Pp 57, 1995.

4）杉山義朗ほか，「高齢者のスポーツ活動と生きがい意識との関連」，老年社会科学，8：161–176, 1986.

5）横山博子，「主観的幸福感と活動との関係について」，老年社会科学，11：151–166, 1989.

6）堀田千秋，「ホームヘルパーの仕事・役割をめぐる諸問題」，日本労働研究機構報告書，2002.

7）伊藤幸子，「ホームヘルパー養成研修の課題と展望」，日本社会福祉学会全国大会研究報告概要集，Pp 278, 2000.

8）宇和川邁，「介護保健施行2年　ホームヘルパーの劣悪な諸条件の実態」，総合社会福祉研究，20：80–91, 2002.

*1　余暇生活実態の調査項目（以下の20項目）

1．仕事とは直接結びつかない習い事をしている
2．仕事以外に熱中している遊びがある
3．毎日，意識して自分の時間をつくるようにしている
4．月に一度は郊外や野外に出て楽しんでいる
5．教養を高めたり，社交のために会合（パーティ）に出るようにしている
6．年に一度は旅行をしている（仕事での出張は含まない）
7．地域社会活動（PTA，自治会，子ども会など）に参加している
8．ときには家族とだんらんをして楽しんでいる
9．休みには外食やショッピングをして楽しんでいる
10．スポーツクラブやチームのメンバーとして積極的に活動している
11．映画，観劇，演奏会，スポーツの試合などをよく観に出かける
12．職場や地域のレクリエーション活動によく参加している
13．人からスポーツやゲームに誘われると喜んですぐに応じる
14．自分の趣味について専門家なみに，しかも自信をもって説明できる

15. 余暇に行う活動や行動は暇つぶし以上の何かをもたらしてくれる
16. 余暇に行う活動や行動は生きているという実感を感じさせたり，精神的な充実感を与えてくれる
17. 余暇に仕事以外でやりたいことや趣味のことに使っている
18. 会社の友人以外に心を許しあえる友人が5人以上いる
19. ボランティア活動や社会奉仕活動をしている
20. 休日明けには気分さわやかに，しかも意欲的に仕事に取り組める

＊　本研究は，日本レジャー・レクリエーション学会大会（2001）において口頭発表したものにさらに継続して実施した調査データを加え検討したものである。